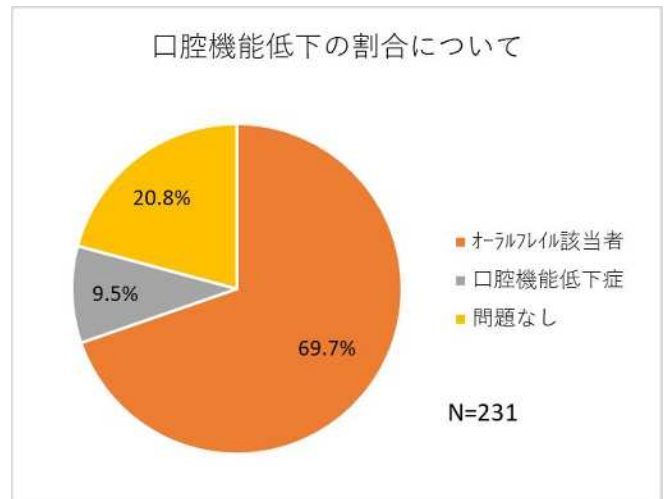


オーラルフレイルチェック事業の分析結果について

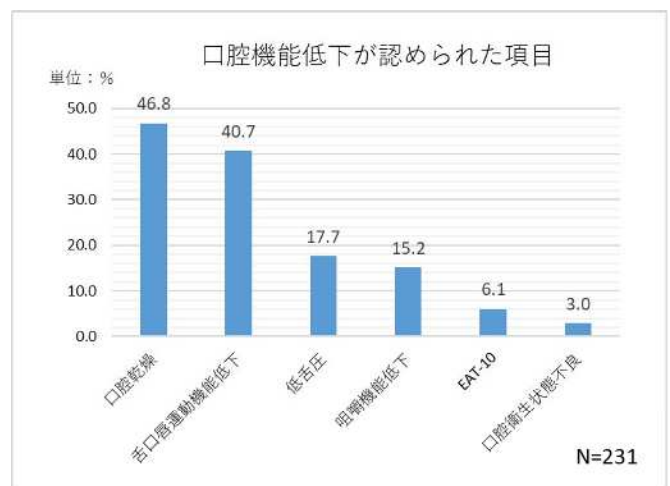
1. 結果の概要

① 口腔機能低下の割合について (第1章)

オーラルフレイルチェックを受けた方 231 名 (65・66 歳) のうち、口腔機能の低下がなく問題ない方は 20.8% であり、79.2% は口腔機能が低下していた。その内訳は、オーラルフレイル該当者が 69.7%、より低下が認められた口腔機能低下症の方が 9.5% であった。



口腔機能低下が認められた項目は、多い順に、口腔乾燥 (ムーカス) 46.8%、舌口唇運動機能低下 (健口くん) 40.7%、低舌圧 (JMS 舌圧計) 17.7%、咀嚼機能低下 (グルコセンサー) 15.2%、EAT-10 (嚥下機能評価アンケート) 6.1%、口腔衛生状態不良 3.0% であった。



② 性差について (第2章)

男女別にみると、男性は、舌口唇運動機能低下者が女性より多く、中でも「カ」が女性に比較して有意に劣っており、嚥下に必要な舌後方部の運動機能が低下している可能性が示唆された。

女性は、低舌圧 (JMS 舌圧測定器) および咀嚼機能 (グルコセンサー) について、男性より有意に劣っており、咀嚼や食塊形成および嚥下に支障を生じ、必要な栄養摂取がしにくい可能性が示唆された。

③ 問診項目の妥当性について (第3章)

フレイルチェック口腔機能の問診 3 項目 7-①~③については、オーラルフレイルチェック結果および EAT-10 との関連が認められたため、フレイルチェックの口腔機能に関する問診項目が妥当である可能性が示唆された。

④ 測定機器に代わる問診項目について (第3章)

フレイル問診 25 品目咀嚼状態については、25 品目中 8 項目に咀嚼機能（グルコセンサー）との関連が認められ、咀嚼状態を表す指標として妥当である可能性が示唆された。中でも、特に「かた焼きせんべい」は、咀嚼機能（グルコセンサー）とオーラルフレイルチェック結果の両方での関連が認められたことより、咀嚼状態や口腔機能低下の指標になると考えられる。

口腔乾燥（ムーカス）は 46.8%に認められたが、口が渇きが気になるという自覚症状がある者が 23.7%であり、口腔乾燥（ムーカス）の代用が可能な問診項目は認められなかった。

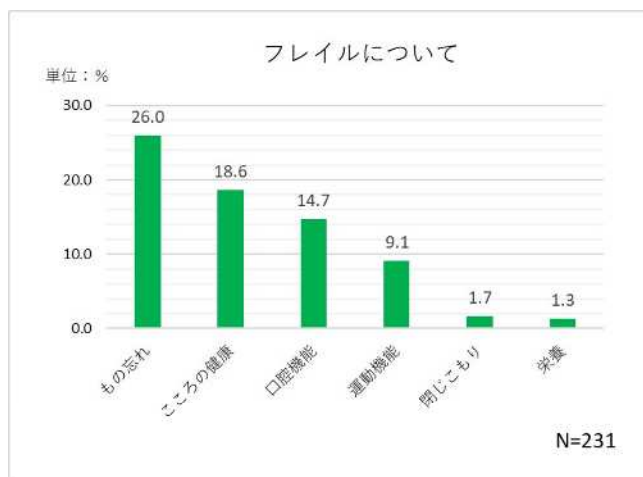
自己申告の歯の本数は、歯科医師による診査結果である現在歯数との乖離が認められた。

⑤ 口腔内状況と口腔機能について (第6章)

現在歯数が少ないほど、グルコセンサーの数値（咀嚼機能）の低下が認められたことより、現在歯数と咀嚼機能との関連性が認められた。

⑥ フレイルについて (第4章)

フレイルチェックの結果、フレイル「総合」該当者は 1.3%であった。その内訳は、多い順に「もの忘れ」26.0%、「こころの健康」18.6%、「口腔機能」14.7%、「運動機能」9.1%、「閉じこもり」1.7%、「栄養」1.3%であった。



⑦ フレイルとオーラルフレイルについて (第5・6章)

現在歯数が多いほど噛める品目数が多いだけでなく、フレイルの該当項目が少ないことより、歯を残すことがフレイル予防に関連する可能性が示唆された。オーラルフレイルチェック結果が、フレイル「こころの健康」および「運動機能」にも関連することが示唆された。また、EAT-10 や口腔機能測定結果が、フレイル「総合」、「こころの健康」、「閉じこもり」、「運動機能」、に関連することより、オーラルフレイルが心身のフレイル全体に強く関連することが示唆された。

2. 考 察

- ① 今回の対象者は、国保加入者かつ65歳でフレイルチェックを受け、翌年オーラルフレイルチェックを受けた方に限定されるため、神戸市民全体を表しているかどうかは不明である。しかし、自主的に2回のチェックを受けた健康に関心が高い方々の集団であるにもかかわらず、口腔機能の低下を認めた方が約8割という結果だったため、市民が口腔機能チェックを受ける機会の提供が必要であることが痛感された。
- ② 舌圧および舌口唇運動機能などは嚥下に必要な機能であるので、放置すると必要な栄養摂取が難しくなり低栄養などにつながるため、男女ともに、口腔の体操などによる訓練に関する啓発が必要である。ただ、全体で221名、うち男性が59名であることを考えると、さらにオーラルフレイルチェックを実施するなどして対象者を増やす必要がある。
- ③ グルコセンサーについては、25品目咀嚼状態および現在歯数で推察できる可能性が示唆された。
また、「かた焼きせんべい」が咀嚼状態や口腔機能低下の指標になると考えられることより、今後フレイルチェックの内容について見直す場合は、25品目ではなく品目を限定することも考慮する必要性を感じた。
- ④ 口腔乾燥については、約半数が該当しているにもかかわらず、自覚症状が少なく、放置すると食塊形成や嚥下に支障をきたす可能性があるため、口腔内診査などによるチェックの必要があると考ええる。
- ⑤ 現在歯数が多いほどフレイルの該当項目が少ないことより、自分の歯を1本でも多く残すことが、心身のフレイル予防につながる可能性が示唆された。8020運動として「自分の歯を残そう」と啓発することにより、健康寿命の延伸に寄与する可能性が示唆された。ただ、本人が自分の現在歯数を正しく理解していないため、今後、歯科医師会とともに市民への啓発ができればよいと考える。
- ⑥ 口腔機能が心身のフレイルに関連することが認められたことより、口腔機能を維持することにより、人と会話や食事するなど、社会参加が可能となり、運動、閉じこもり予防、こころの健康などのフレイル全体の予防につながることが示唆された。ただ、今回の調査は横断的な調査であるため、今後、縦断的な追跡調査（コホート）を行うことが必要である。